

# ことばの力とリスクマネジメント： ヨーロッパ組織論の視点

西南学院大学文学部 准教授  
清宮徹

## [1] はじめに

「リスクマネジメント」は、「危機管理」という漢字の言葉とともに、日本の社会に定着してきた。自然災害や事故などを予防したり、発生後迅速に対応する方法としての危機管理という考え方（経営手法）を、人々は一般的に創造するであろう。これらは従来までの主流派リスクマネジメントと考えられるが、不祥事をはじめとする多様化する近年のリスクに対応するため、新たな方向性が示される時期と考える。リスク事象が多様化するにつれ、従来型のリスクマネジメントは十分な機能を果たしているとはいえ、これらに対応する視点と方法を模索しなければならない。それは単にリスクマネジメントの新たな手法を開発するというのではなく、基本的な考え方を含めたパラダイムの変革が求められる。

そこでこの論文は、これまでのリスクマネジメントの方法と考え方に、基本的な問題提起を行うものである。ヨーロッパ組織論を参考に、そこでおきている大きな潮流の転換を、リスクマネジメントの領域において応用することを目的とする。こうすることで、伝統的な主流派リスクマネジメントが直面している多様なリスク現象に新しい視座を与え、その限界を乗り越えようという試みを持っている。しかし、ひとつ注意すべき点がある。それは、ヨーロッパの観点は常に優れているとか、欧米の最新の方法が全て正しいということを意味しているのではない。むしろ、ここからヒントと大いなる刺激を受け、どのように日本的に発展させるのが重要である。そのような意味で、外来語としての「リスクマネジメント」を、日本の背景と文脈に合う形で、日本的なリスクマネジメントを模索していくものである。

## [2] ヨーロッパ組織研究会と リスクマネジメント

### (1) 組織論とリスクマネジメント

学術的な観点から、リスクマネジメントは一つの領域あるいはトピックとして認知されるが、独立した領域というより、多くの領域にまたがりながら横断的に研究がおこなわれていた。しかし組織論においては、これまで主要なトピックとして研究されてこなかった。組織論研究者は、事故や倫理的なテーマを取り上げることはあったが、リスクマネジメントの観点とはあまり強い接点を持たなかったといえる。組織を巡る近年の重要な問題や課題は、単に組織論の伝統からだけでは理解や説明、また対応策が困難な事柄が多い。リスクマネジメントと組織論との結びつきは、リスクマネジメントがそもそも持っていた学際的な立場とうまく呼応する形となった。こうすることで、リスクマネジメントが直面している多様化するリスク事象に、組織論の新たな視座が対応し、リスクマネジメント自体の閉塞状況を乗り越えることが可能

となる。

組織論とリスクマネジメントのコラボレーションは、2つの重要な著作によって代表される。そのひとつは、現代アメリカでも影響力のある経営学者の一人、カール・ワイクの「センス・メイキング」という考え方を、リスクマネジメントに延長する形で発展させたものである。その著書はすでに日本語訳もあるので、詳しくはこれを参照していただき、ここでは深い言及は避けることにする。しかし後に見るように、ワイク理論はヨーロッパ組織論におけるリスクマネジメントに強く影響していることは事実である。もうひとつの著作は、2007年に出版されたマイケル・パワーの『Organized Uncertainty』<sup>(注1)</sup>であろう。著者であるパワー氏は、会計学を専門とするイギリスの経営学者であるが、この著作が契機となり、リスクマネジメントに関する研究と教育が増えているようだ。後に紹介するように、彼は2008年のヨーロッパ組織研究会(EGOS)<sup>(注2)</sup>でその考えを述べ、リスクマネジメントと組織論が共通する新たな方向性を示している。

パワー氏をはじめとするヨーロッパ組織論とリスクマネジメントのコラボレーションについて、次節にその論点の詳細を見るが、パワーとワイクの二人に共通している地平について述べておきたい。それは両者ともに、リスクマネジメントと組織論における従来までの科学主義的な立場、実証主義や客観性を重視した観方からの脱却を目指している。ワイクはルールやマニュアル、規律をしっかりと守り、合理的な判断や行動を行うということが、あまり意味を持たないことを指摘し、むしろこれまで無視され批判されてきたあいまいな組織行動を効果的に使うことの意義を示している。これは従来のリスクマネジメントや組織論とは異なり、組織の秩序だった指揮命令系統や情報のコントロールという科学的な観点や合理的な考え方を反省するものであった。パワーは、リスクを評価する私たちの視点が客観的で科学的であることの限界を示唆し、リスクマネジメントが組織論的な政治的葛藤の中で生み出される側面を指摘している。これは明らかに伝統的な組織論とリスクマネジメントを支えていた「科学的」という観点を乗り越える作業である。このような新しい観点をしに、複雑で多様化するリスク事象に対応できないのではなからうか。

### (2) ヨーロッパ組織研究会で議論されたリスクマネジメント

組織論に関するもっとも活発な議論は、ヨーロッパ組織研究会(EGOS)を中心に進められている。2008年7月にアムステルダムで開催されたEGOSの年次大会では、50近い部会が多様なテーマについて議論を行っている(これら部会のテーマは毎年変わる)。その中の一つがリスクマネジメントについて焦点をあてたものであり、「リスクな組織と組織のリスクマネジメント」とい

うタイトルの研究部会であった。これまでのEGOSでリスクマネジメントを中心とした部会がなかったこともあり、これを待っていたかのように大勢の参加者があり、50余りある部会でもトップクラスの盛況ぶりであった。

図表1で示すような、多様なテーマが議論された。これらは、リスクについて研究している人にとってとても示唆的であり、多くのヒントを含んでいる。テーマの観点からみた特徴としては、航空機事故を中心とした航空業界や公共組織という新しい研究領域が目立った。もう一つの特徴は、リスクマネジメントを合理的な判断や問題解決のための意思決定という観点で考察するのではなく、組織メンバーのセンスメイキングとして考えることで、物事の意味の決定過程を重要視している点にある。これは前述したワイクの組織論の考え方を応用したもので、職場の日常を作り上げるさりげない意味の形成・確認作業を重視し、この意味形成に意思決定や合理的な判断、解釈の方法が依拠していることを主張するものである。これはテーマとしての新しさもさることながら、考え方の大きな方向転換を示唆していた。この会議で発表された大事な論点が、このような新しいパラダイムのもと、リスクマネジメントの方向転換を示していた。

### (3) 新たなリスク

EGOSの会議で議論されたリスクマネジメントで、大きくクローズアップされたのは、新たな種類の危機・リスクという点で、そのひとつは「企業の不祥事や不正」をリスクとしてとらえ研究対象にすることである<sup>(注3)</sup>。

これらの議論は、主流派リスクマネジメントが従来あまり考慮に入れていなかった領域に視点を向け、これをリスクマネジメントの主要なターゲットとすることである。これまでリスクマネジメントの主流は、自然災害や事故など、目に見える“物”や“事柄”をリスクの対象としてきた。もちろん、このような単純なリスクばかりではなく、制度的・法的なリスク、カントリーリスクといった、手に取り触れたりすることのできない、抽象的な産物としてのリスクも含まれていた。しかしこれらに共通して言えることは、リスクは組織の外部的な存在であるという点である。別な言い方をすると、組織の外的な要因として、まるで対岸で起きた火事の火の粉をたまたま運悪くかぶってしまったようなイメージである。このリスクの外部性については、後に別な議論と絡めていきたい。ここで大事な点は、従来のリスクマネジメントは組織の内的な要因をあまり重視していない点である。とくに「企業の不正や不祥事」は、内部発生的なリスクである。リスクの発生・形成の観点で考えると、不祥事は伝統的なリスク事象とは異なる性質を持っているといえる。伝統的なリスクマネジメントが、外的なリスクを測定してコントロールすることを基本と考えるのに対し、不祥事のような内部発生的なリスクは測定する人もリスクを現実化する人も内部の人であり、通常のリスクマネジメント手法であるリスクの測定とコントロールというアプローチを無意味にしてしまうことである。

近年リスクマネジメントが取り組まなくてはならない組織を取り巻く社会現象は、このようにリスクの外在的性質にとどまらず、より高度に政治的で複雑な社会的文脈を考慮にいれねばならない。

### (4) プロセス重視のリスクマネジメント

EGOS会議の多くの発表を通じて観察できたことは、組織論研究者がリスクマネジメントを考えると、リスクを管理するプロセスを重視しているという点にある。このプロセスという考えは広く受け入れられるが、じつは多様な意味がこのプロセス概念の中に含まれている。パワー氏が強調するのは、リスクマネジメントは外部から監視するのではなく、組織の内部でひとつひとつの意識の中にリスク的な感覚（規制や監視という内部管理）が浸透するプロセスを指摘する。このようなリスク浸透過程としてのプロセス重視のリスクマネジメントを、リスク専門部署やリスク担当役員、ERMといった制度的アプローチと結びつけている。このリスク浸透プロセスと制度的リスクマネジメントとの関係を具体的に考えると、組織メンバーのコミュニケーションが重要であることがわかる。リスクマネジメントの新しい制度を導入しても実際に機能しないのは、組織メンバー内の相互理解が欠けているからであり、コミュニケーションを通じて組織文化の中にリスクマネジメントを「内面化」していく必要があるのだ。この「内面化」していくコミュニケーション過程で大事なのが、言語の役割であり、意味理解である。先にも述べたが、意思決定の状況や文脈を作り上げる意味形成（センス・メイキング）のプロセスが、リスクマネジメントを内面化するものであり、合理的なリスク判断の連続という意味でのプロセス重視ではない。

他にもプロセス重視のリスクマネジメントが議論された。そのひとつは、事業継続リスクマネジメントであった。日本でもすでに紹介されている方法であるが、伝統的なリスクマネジメントより広い視野を持ち、リスクマネジメントは事業継続という過程の側面と考えられる。EGOS会議の発表で印象に残っているのは、この事業継続という管理プロセスを、まるで品質管理活動のようにとらえていることである。品質を生産工程の中で作りこむように、リスクを日々の生産やサービスの活動の中に位置づけていることは、きわめて重要なポイントであった。そしてこの組織プロセスとしてのリスクマネジメントは、単に制度的なシステムや経営手法として意義があるのではなく、事業継続のプロセス管理の中に内面化したリスクマネジメントがビルトインしてこそ、大きな意義を持つのである。つまり制度的で形骸化した事業継続ではなく、リスクマネジメントを組織の文化に落とし込むことが大事である。そしてそのためには、日々の活動の中にリスクの意味をとらえたコミュニケーションが不可欠であり、そのコミュニケーション過程とは具体的には人々の語りと対話によるものである。結論として言えることは、プロセスを重視するリスクマネジメントに必要なのはコミュニケーションの視点であり、問題やリスクを生み出すのもコミュニケーションであり、これに対応するのもコミュニケーションに他ならない。そしてコミュニケーションという対話と語りのプロセスにおいて、リスクの意味が解釈・形成される点に注目すべきである。

## [4] リスクマネジメントのパラダイム転換

### (1) 伝統的な観点からの脱却

先に述べたようにリスク事象の外部性は、伝統的なリスクマネジメントの前提であった。しかし、EGOSの論文の多くは、これを前提としていない。むしろ過度な科学主義を反省し、それとは異なる世界観を示している。この世界観は、社会的現実という基本概念をもち、客観的な現実や唯一の真実という考えを退ける。

ヨーロッパ組織論では、このような社会的構築（構成）主義という考え方が大きな力となり始めている。この観点をもとにしたリスクマネジメントと組織の関係が、EGOS会議では活発に議論された。

この観点の画期的なところは、リスクという現実・事実は、組織とそのメンバーから独立した客観的な存在ではないとする点にある。科学的なリスクマネジメントは、主観を排し、客観性を前提とする。つまり、リスクを客観的な対象（物）として主観から切り離れた存在とすることで、そのリスク要因を洗い出したり、リスクを査定したり、主観からの独立したかたちでリスク事象を管理するという点を基本的な前提としてきた。しかし、社会構築主義の世界観は、社会や組織のメンバーから独立した客観的存在という観方を排し、あらゆる現実・事実は社会的に作り出されるという前提に立っている。したがって、リスクという現実客観的なものではなく、科学的に測定できるものではなく、むしろリスク事象そのものは社会的に構成され、人々によって作り上げられていると考える。リスクという事象や事実そのものに意味が備わっているのではなく、人々が事実を構築しながら意味形成すると考える。リスクという意味は主観性からは切り離せないもので、リスクを認知することは、人々の意味解釈に依存していると考える。リスクの客観性とその測定が意味を持たないと考えることは、従来の主流派リスクマネジメントにとっての根幹を揺るがすものであり、とても大きな方向転換をリスクマネジメントに迫るものである。

## (2) 社会構築的視点で見るリスクマネジメント

パーワー氏は、著作の最終章の中で、リスクマネジメントにおける社会構築主義的視点を提起している。そして、「リスク対象の社会的構築」と「リスク管理の社会的構築」の2つの側面が、リスクマネジメントにおける社会構築過程に含まれていると主張する。前者は、伝統的リスクマネジメントがターゲットとして考えるリスク事象が、意味の構築過程とともに社会的に形成されるということである。たとえば、従来までの火災や地震は組織とは独立した外的な存在に見えるが、そのような事実や事象は組織と関係なく存在していない。組織とそのメンバーとの関係の中で初めて、特定の実事や事柄が「リスク対象」として意味が賦与されるのであって、事実や事柄そのものにリスクという意味がそもそも備わっているのではない。特に不祥事では、その「事柄」を組織の内部から産み出しているため、偽装表示や粉飾決算、使い込み、脱税、セクハラといった「事柄」を構築するプロセスの中で、不正という意味やリスクという意味を賦与すると同時に解釈する（これは、次節の「意味の交渉」でもう一度考察を加える）。基本的に、ここにあげたような不祥事事件として報道されるような「出来事」にはじめから意味が付着しているのではなく、社会や組織の中で意味が理解され浸透するという点は、「リスク対象」の社会的構築という視点にとって大事なポイントである。

「リスク管理の社会的構築」も同様に考えることができる。従来のリスクマネジメントは、リスク対象を測定し、アセスメントすることで、回避策や事前準備など多様なリスク管理を実施するが、社会構築主義の観点からはみると、この管理の実践はすこぶる政治的であり、ベストプラクティスや客観的で科学的な最適な施策は不可能であると考えられる。合理的な思考によって最適な選択をするという管理は、組織の人間関係や職場の力関係などの「現場の

文脈」によって形成され、職場に特有な意味が付与される。これはリスク管理が不可能だとか無意味だという主張ではない。そうではなく、リスクの管理には、組織と職場の文脈を考慮しなくてはならないということである。つまり最善のリスク管理と云って経営トップが提示するものにも、組織文化、人間関係、政治的な要素が含まれているのであり、客観的で科学的という看板のもとに提示された施策ほどあやしいものはないということ。またリスクマネジメントの最も効果的な方法やリスクの真理は、人から離れて潜んでいるのではなく、人々によって社会的に作り上げられるのだ。したがって、科学的な探求によって効果的なリスク管理が発見されるのではなく、合理的な判断によってのみリスク管理が実現されるのでもなく、リスク管理は人々の日常的な営為の中から生み出され実現されるものと考えべきだろう。

## (5) ことばの力：経営を文学する

### (1) ことばへ注目する社会科学

このような新しい哲学的視点からみると、リスクマネジメントを含めた経営学や社会科学全般は、どのような方向に向かうのだろう。たしかに従来の社会科学は過度な科学主義を反省し、より柔軟で相対的な観点を取り入れ、その限界を乗り越えようとしている。しかしながらこの立場は組織の構造や機能を重視し、人々の行動がこれらの構造によって決定づけられるという観点をくずしていない。ヨーロッパ組織論の中にはこの考えに同調するものもあるが、これに反する観点を提起しているのが、ポストモダンという近代哲学をその背景に持つ研究者たちであり、構造決定主義を拒否する立場である。この考えについて詳述することは、本稿の目的ではない。たとえて言うなら、これまでの主流派が「経営を科学する」ことを目指したのに対し、社会構築主義的なポストモダン組織論は「経営を文学する」といえるであろう。このたとえから何が連想できるだろうか。たとえば、作者の意図と読者の自由な解釈。書き手と読み手の間で繰り広げる意味の交換。科学に対して異なる価値を持つ芸術性（科学的な根拠や証明より、美しさや感動、癒しに価値を置く）。「文学」という言葉から連想される意味世界は、ここにあげた解釈以外にもいろいろな意味解釈を受け入れるであろう。そしてこの多様性を許容し、歓迎することこそが文学であろう。この観点は経営組織に応用可能であり、リスクマネジメントにも活用されるべきである。

経営を文学することは、ルールや制度、罰則、権力、組織構造を通じて人々の行動を規制し管理するのではなく、感動や美しさによって何かを作り上げる協働作業と考える。それは書き手と読み手の関係と同様に、意味をめぐるコミュニケーションの過程である。ここで重要なことは、このコミュニケーション過程における中心的役割が言語、「ことば」であるという点である。これは単に話しことばだけでなく、書きことばも含まれる。たとえば広告や宣伝といった文字や映像も含まれるし、インターネットの普及に伴うホームページ上のメッセージは重要な役割を持っている。さらに言えば、組織のシンボルであるような社章やロゴ、ユニホームや職場のオフィスレイアウトなども経営を文学する材料になる。ヨーロッパの組織論の多くは、このような多種多様な言語（ディスコース）を研究する。そして、この方向転換をリスクマネジメントの視点に応用する試みが行われている。

## (2) ことばの働き：意味の交渉

経営を文学するという方法において、「ことば」の役割はとても重要である。ヨーロッパ組織論の多くの論文が、「ディスコース的・」というタイトルをつけて議論されるように、組織と経営の研究において「ことば」は大きな位置を占めるようになった。しかしこれはヨーロッパ言語の伝統に根ざしたものだけではない。日本には「言霊」という古来の思想があり、良いことばを口に出して発することが良い現実につながるという考えを日本の文化はもっていた。ここで注目すべきは、「言」と「事」は同じであるという観点だ。特に組織の不正を例に考えれば、不祥事という「事」柄は人々の「言」葉から形成されているのであり、この不正という「事」実を変えることができるのも、「ことば（事／言葉）」によるものなのだ。

「リスク」ということばは多様な意味に解釈される。そもそもリスクということばそのものが意味を持っているのではなく、そのことばを使う人が、リスクということばを通じてどのように世界を解釈し、今起きている出来事を理解するかに依拠している。それと同時に、他方で、このリスクということばを使って人々はある特定の現実を構築するのであり、これを通じてその人が使う「言」が「事」に転換されていく。人によっては「リスク」を否定的な意味として解釈し利用するが、別の人は「リスク」という同じ言語を使って肯定的な意味に解釈し、その現実を作り上げる。したがって、「リスク」ということば自体に意味が備わっているのではなく、また辞書的な意味がそもそも先にあるのではない。そうではなく、人々の行為の過程の中でリスクということばが使われ意味が定着するのである。これは多くの場面で言えることで、人々が言葉を通じて現実を理解し、同時に言葉を通じて現実を作り上げている、その不規則な言葉のキャッチボールにおける意味の確認作業が日常生活の中で行われている。これを意味の交渉(negotiation of meaning)と呼んでいる。

経営と組織における人々の行為は、常に目的-遂行という合理的なものではない。組織の問題解決における意思決定を、デシジョン・メイキング(decision-making)というが、そのような目的な行動ばかりではない。むしろ組織での多くの行動はさりげない意味の交渉過程である。まるでサッカーボールで不規則自由にパスをまわすかのようにしながら、意味は形成され、人々はこのコミュニケーション過程を通じて意味を理解するのである。そしてゲームを作り上げるのである。まるで、ことばをお手玉するかのように、またことばによってお手玉されるかのような日常である。この意味交渉の中で、さりげなく行われている行動は、意思決定(デシジョン・メイキング)ではなく、意味決定(センスメイキング)なのである。この意味交渉において、その意味を確認する時もあれば、そのとき意識していなくて事後的に分かる時もある。相手と異なった理解をするときも多いが、センスメイキングの過程を通じて納得性を獲得する努力が続けられる。職場におけるこのような日常の意味交渉過程が重要であり、リスクという言葉と事柄がこの過程の中でもみこまれ、意味構築していかねばならない。言霊の考えが示すように、「リスク」や関連することばを通じて、私たちの職場において意味を作りこむ作業が必要であり、この意味交渉を通じて組織と経営にとって良い事柄を生み出すことが、ことばによる経営であり、ことばの戦略である。

## (3) リスクマネジメントへの展開

リスクマネジメント協会を通じて2006年に実施した記述式アンケートでも、ことばとリスクマネジメントの重要な関係が現われている。「あなたは法令違反ぎりぎりの行為が、従来から社内の慣行となっている場合、どのように行動しますか?」という記述式回答の質問を尋ねた。その結論はパワー氏の主張と同じであり、リスクマネジメントはそこで使われることばとその意味に依存し、不祥事におけるリスク対象とリスク管理は社会的に構築されているということだ。

人々は不正にどのように対峙するか、アンケートの回答に現れた「ことば」を分析し、その意味構築の過程を考察した。その結果、次のようなことがわかった。多くの人々は、法に触れるような明白な不正、また上司や取引先から指示を受けるような明確な不正の関係を受け入れることは少なく、むしろ「あいまいな語り」の戦略が展開されながら、「ファジーな不正」が繰り返し生み出されていることがわかった。この「あいまいなコミュニケーション」過程が、ファジーな不正と密接な関係を持っているのだ。とくに質問の表現にあった、「不正ぎりぎり」ということばに対して多様な反応が見られ、これを見ることでリスクとコンプライアンスについての意味形成が考察できる。とくに留意する点は、「不正ギリギリはOK」という表現であった。たとえば、「ぎりぎりセーフであれば、従来通りに行動する可能性あり」や、「ぎりぎりでも白なら気にしない」のような語りがある。さらに、「ぎりぎりであっても法令違反でなければ、必ずしも改める必要はないだろう」というように、「違反しないギリギリの線なら許容する」という表現があった。「ぎりぎり」という直接的な表現はないが、類似した語りとしては、「違反でなければ問題ないと考える」があげられる。

この「違反しないギリギリの線なら許容する」という表現では、法律やルール(規範を含む)に触れない限り、不正に限りなく近い「やばい」と感じる仕事や職場の悪い習慣も受け入れるということである。仕事上または組織上、自らの行為が法的にグレーゾーンの中で問題あるかもしれないと感じていても、法やルールを違反しなければ最終的には受け入れられるということの意味する。もっと極端な言い方をすれば、問題ある行為もギリギリならオーケーということは、限りなくクロでもグレーでありさえすれば悪質な仕事も行えるということ。つまり法律に抵触するかどうか最大の「問題」であり、その行為自体が「問題」であるとか、社会性から逸脱しているという意味に解釈していないのだ。

しかし回答の中には、「違反でなければ問題ないと思うが、倫理上の問題もある」という意識を持っている人もいた。ここで大事な点は、「ギリギリ」ということばの感覚・意味が個人によって異なり、この法的あいまいさを語ることで、組織における不正の状況という現実(事実)が社会的に構成されている点にある。この「ギリギリ」ということばの持つあいまいさが、組織や社会の中で意味形成され、この言葉の使い方と使われ方が組織の不正と密接に結びついていると考えられる。「ギリギリはOK」という語りが示すのは、組織の中で人々は、あいまいで「ファジーな不正」を言葉を通じて認知すると同時に、このことばによって自分の行動そのものを規定しながら「ファジーな不正」を形成したり回避したりしているのだ。

問題が繰り返し生み出されるコミュニケーションの過程を、意味交渉という「語り」の視点で考察することによって、より効果的な分析と解決の方策が見出せるであろう。このように「ことば」

の視点は、人々の悪意ある動機が不正を導くとか、不正の温床である組織風土が不祥事を生み出すというような視点とは異なる。つまり動機や因果関係を科学的に測定しコントロールするというアプローチが持つ限界を乗り越えようとしているのだ。また、法や規制を明確にしたり強化する方法はあまり効果ないことを示している。法律やルール強化はあいまいさの言語戦略によって、ファジーな不正の中に屈することになるだろう。ことばの力を考慮するリスクマネジメントこそ、社会と組織の真剣な変革をリスクマネジメントに結びつけるものである。このような新しいパラダイムと視点をもつ「言語的アプローチ」は、より複雑で見えにくいリスクの領域を分析し解釈する力を持っている。これは単に学術的な観点から有意義だけでなく、本気でリスクの問題に取り組み、組織と社会を変革するための実践的な手法に作り変えられるであろう。とくに日本古来からある言霊思想をもとに、日本語的なコンサルティング・アプローチを模索し、リスクにおける「言霊経

営」を示唆するものである。

---

#### 【脚注】

注1：日本語の翻訳はまだなく、待ち望まれる。

注2：ヨーロッパ組織研究会 (European Group for Organization Studies) は、ヨーロッパで最も活発で最新の組織理論とその実証研究を議論している学会である。

注3：他にあげられた新たな企業リスクは、「テロ」である。特にイギリスとアメリカの研究者が多い中、この2つの国で起きているテロは深刻な影響を企業活動に与えているようだ。

---

#### 【参考文献・データ出典】

清宮徹「ことばの中の倫理的なまなざし」高井俊次（編著）『語りと騙りの間』（近刊）カール・ワイク、キャスリーン・サトクリフ『不確実性のマネジメント—危機を事前に防ぐマインドとシステムを構築する』ダイヤモンド社（2002）

Power, M. (2007). *Organized Uncertainty: Designing a World of Risk Management*. Oxford University Press

## 図表1 EGOS 年次大会のリスクマネジメント部会 発表タイトル

1. 9.11 以降のリスクマネジメント：保険市場をどう変えたか
2. 贈収賄のリスクを管理する
3. 見逃されてきたリスク：社会的なリスクを観察理論的視点から
4. スイスの病院における医療リスクマネジメント
5. 実践と標準化の交渉：早期警戒スコアシステムの事例
6. リスキーなビジネス：防衛組織内のリスクマネジメント
7. 天候リスクのマーケット
8. リスクテイクするときの標準化の可能性
9. 組織のリスクと回復力
10. 公共組織のリスクマネジメント
11. 専門技能の社会的構成：リスクの査定と国際的食品安全基準のリスクマネジメント
12. リスク社会体制への反応：オランダにおけるギャンブルと喫煙の比較
13. 安全評価の効果測定
14. 災害における組織：災害復旧計画の失敗
15. 組織におけるリスクの社会的構成
16. 安全性と監査能力
17. 不確実性のリスクへの転換：企業革新における組織のリスクマネジメントの批判的検証
18. 組織的な失敗としての航空機事故：自己分析の多元モデル
19. 組織の災害研究：後知恵と修復への空想
20. 組織の回復力：複雑な操作システムの新技術の統合
21. 多面的ステークホルダーとの対話的アプローチ：ナノテクの事例
22. 技術発展におけるリスクイメージの構築
23. 社会的リスクのリスクマネジメント：公共組織におけるリスクの構築と意図しない結果
24. リスクマネジメントと企業文化
25. 安全の公共統制の核心部における象徴主義
26. 海運業におけるブリッジチーム管理によるリスク低減
27. 化学工業におけるリスクマネジメント
28. 管理者はどのようにしてプロジェクトにおけるリスクを理解するか
29. リスクと組織化：行為ネットの視点
30. 創造的事業におけるリスク概念とリスクテイクの役割
31. 安全文化の査定：文化と安全の関係
32. 3つの対立するパラダイム：リスクの高い組織における安全文化の構造決定主義にむけたモデルを基にしたアプローチ

\*タイトルの順番は EGOS 大会のプログラムの構成順